



新年あけましておめでとうございます
みなさまのご健康とご多幸を心より
お祈り申し上げます

平成 22 年元旦

まちづくり協議会一同



年頭にあたって

壬生野地域まちづくり協議会 会長：山岡耕道

新年明けましておめでとうございます。

皆様方には、ご家族お揃いでよいお年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、世界的な金融危機に端を発した経済不況が更に長期化し、デフレ傾向をも相俟って日本経済はもとより地域経済にも大きな影を落とし、地方の時代といわれて久しい中、特色ある地域づくりには、ほど遠いものがありました。

今年こそ希望に満ちた明るい年になることを願うものであります。

さて、私たちのまちづくり協議会も、設立 7 年目に入り、私が協議会の会長を拝命して早いもので 8 カ月が経過いたしました。その間皆様方には、各種の事業推進に格段のご支援、ご協力をいただき「壬生野まちづくり計画」に基づき着実な歩みを進めてまいりました。

本年は、その経験をもとに更なる特色ある地域づくりに取り組むため(より多くの方の参画を願うために)、組織の一部改正を提案させていただき、ご議論をいただく予定です。

また、本年の目標の一つとして、私たち地域が抱えている課題を再検討し、問題解決への



花の寄せ植えでひとときを
一緒にたのしみました。

園芸福祉グループ「あしたば」さんのご指導で昨年 11 月 28 日壬生野地区市民センターで寄せ植えづくりを楽しみました。

シクラメン、ジュリアン、ピオラ、アリッサム、ミニ葉牡丹、ゴールドクレストの花もの、葉ものの 6 種類を、鉢底石と用土を入れた丸プラ深鉢に思い思いに配置しました。



寄せ植えは、鉢をどこに置くかにより花材の配置を考えて構成していくことがポイントで、また、根鉢の肩が鉢ふちから 2 ~ 3 cm 下げた位置として土を平らにして水やりの時、水がまんべんに行き渡るようにしてあげることだそうです。

植物と共に生きる喜び、花の美しさを大切にしたいと思いました。きっと綺麗な花々が咲き続けることでしょう。

《教育文化専門委員会》

造園師のたまごが誕生しました。

昨年 12 月 5 日、いがまち造園組合のご協力をいただき整枝剪定作業の講習を行いました。

あいにくの天候のため室内で、松、ヒバ、山茶花の剪定要領を学びました。実際にやってみて中々奥深いことが分かりました。あとは実践で試してみることにします。

《生活環境専門委員会》



編集後記



郷土の皆様よいお年をお迎えのこととお慶び申し上げます。みなさん、今年は何にチャレンジしてみますか。私は、欲張らずに最後までやり遂げられそうなことに絞って、是非がんばって始めてみようと思います。きっと達成感あふれる素晴らしい一年になることでしょう。

ご意見・お問い合わせ・投稿は、下記までお寄せ下さい。
壬生野地域まちづくり協議会広報委員会 TEL: 45 - 8900



は御産部の意で、皇子誕生の際、産殿に奉仕する諸部を称したもので、^{みぶおみ}壬生臣或は壬はこれ等の官職であって生部公之を統率したものである。なお、壬生氏伊賀に居住したことは、正倉院文書などに散見する。また、其の他名張郡（旧称）中村に壬生寺と称した古刹^{こせつ}が存在した事実に徹するも、伊賀各所に壬生氏のあったのを知ることができる。そうすると此の村だけ特に壬生と云い、殊に野の字を附したのは、何故であろうと疑問になる。そこで古書の類を調べてみると伊賀史に「敏達天皇の御宇申牛五月。伊賀の国三室山一夜に崩れて沢と為る。今三室の滝の池也。」三国地誌第 63 巻蛇咋池の条に「今昔此野を身野と云う。三室野は其の転訛せるなり。」などとある。思うに、蛇咋池や滝山の西部一帯の地を、昔身野とか三室野とか云い、また、近くに壬生という姓の者があったから、三室野に壬生野の文字をあて、土地の名を壬生野と呼ぶようになったのであろうと思われる。

では、いつ頃から壬生野地区に人が住み始めたか、約千五百年前であるが、西之澤の野の奥で、石斧が発見されている。二千年前の弥生時代以前から人が住んでいたと考えられます。最初は西之澤、川西より住み始め川東、北出、界外、山畑と滝川を中心としてだんだん川上に向かって土地を開拓しながら人が増えていったようです。
(山畑区 岡森辰義氏提供)



「ふれあいいいきサロン川西」、子どもとの世代間交流を行いました。

昨年 12 月 6 日(日)、川西地区では子ども育成会が中心となり川西公民館で保育園児、小学生、保護者の参加による年末恒例の餅つき大会が行われました。昔ながらの杵と臼で「ペタン ペタン」と始まると、「こんな光景はじめて見る」と子どもたちは大はしゃぎ。「僕も、僕も」と交代で杵を振り上げて大歓声でした。

昼食は、更生保護女性の会の方々のご協力で仕上げていただいたお餅を、みんなでおいしくいただきました。

また、午後からは老人会の役員さんにご協力を頂き、しめ縄作りに挑戦しました。最初は、縄に編むのができない子どもたちも役員さんの優しい指導のお陰で、無事に完成することができ、「お正月に家に飾ろう」と大満足でした。



取り組みを一步一步進めてまいりたいと考えています。

一昨年開設されました壬生野地区市民センターの利用が非常に少ないのが現状であります。私たちのための施設です。大いにご利用いただき地域発展のため活用いただきますようお願いいたします。(硬く考えずに、楽しくご利用ください。)

なお、昨年の 12 月に「伊賀市自治組織のあり方検討委員会」が設置され自治組織の課題を整備し、自治基本条例にある補完性の原則(注)に基づく議論が開始されました。今後は、各地域協議会単位の活動はもちろんですが、伊賀市一円での活動をも視野に入れての組織の見直しを図られると思います。

"ふるさとの継承と新たな住民自治の創造"という基本方針のもと、ひとが輝く 地域が輝く まちづくりのため、壬生野地域まちづくり協議会として努力してまいります。素晴らしい地域づくりのため、一人でも多くの皆様方のご参加、ご協力をお願いいたします。

(注) 決定や自治などをできるかぎり小さい単位でおこない、できないことのみをより大きな単位の団体で補完していくという概念をいい、伊賀の自治について見たとき、中世には“惣”という村落の自治運営組織が存在し、村落はその範囲内に住むすべて(惣で)の構成員により形成されていて、その連合体として“伊賀の国”が形成されていた。また、近年は、地方分権の流れや市町村合併を契機として、自分たちの地域は自ら治めていこうという考えや住民自治の実現が重要視され、伊賀市にとって欠かせないものとなっている。



「壬生野」を知ろう。



壬生野の名称の起源については、^{あめのたるひこくにのおびとのみこと}「天足彦国押人之命の後裔とぞいえる^{みぶおみ}壬生臣此邑に出づ、依って此菜るべし」(新編伊賀地誌)という説があるが、之は姓氏録に「壬生臣、天足彦国押人之命^{のちなり}之後也」とあるによったものであろうが、壬生臣が今の壬生野の地に出たかどうかは明らかでない。なお、古書に壬生野の文字があるのを挙げると、「太子の^{いなもとわけのみしる}為め伊那本和氣之御名代壬生野を定む。」(古事記)、「秋八月朔^{さくひのとうしお}丁丑大兄去来穂別皇子^{ゆききほわのみこ}為め壬生野を定む。」(日本書紀)などがある。このため、壬生と

なつかしき壬生野村歌

一、田代の池に水湛え 流れてやまぬ瀧川に
田園拓け業進む ああ先人も強かりき

二、野^{むすび}幸山幸豊かなる 天意^{てんい}の利に鑑みて
産^{むすび}霊の会に魂^{たま}みがく 若き壬生野に栄えあれや

三、つちかふ教化日にめばえ 今黎明^{れいめい}の鐘ひびく
自治にめざめて諸共に いざうち建てん理想郷

訂正：前号（第 54 号）2 頁の記事中、関西線の「複線化」は「電化」の、「非願」は「悲願」の誤りでした。訂正してお詫びします。